



ちょっとそこまで～お散歩日和(自然編)～



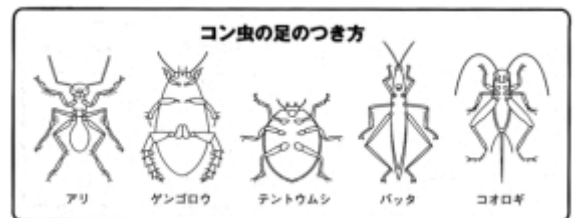
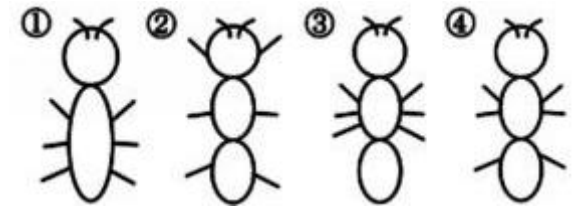
昆虫の冬越し

冬になると、昆虫たちが姿を消してしまいます。当たり前と言ってしまうそうですが、もう少し謙虚な気持ちになって、昆虫の冬越しについて考えてみたいと思います。

その前に、以前どこかの中学入試問題で、アリの絵を描く課題が出た記憶があります。上手に描くことが要求されているのではなく、昆虫の体のつくりをきちんと理解しているかどうか問われた問題でした。さて、読者の皆さんは描けるでしょうか。

ということで、右上の図を見てください。どれが正解だと思いますか。回答者の半数以上が不正解なので、安心して間違ってください。昆虫については、小学校3年生で学習します。このときに押さえる定義は次の2点となっています。

- ① 体が、頭・胸・腹の3つに分かれている。
- ② 胸に足が6本ついている。



胸から6本の足が出ているのが大きな特徴ですので、この点をしっかりと把握できているかが分岐点ということになりそうです。正解は③です。恐らくこの中学では、じっくり観察できる子を入学させたいと望んでいるのでしょう。

少し話は逸れますが、最近の中学入試問題を見ていますと、観察や実験などの体験から得られる学習をちゃんとやってきたかどうかを問う問題がとて多くなりました。目先の賢さは要求されていないのです。

昆虫の定義を知った子供たちは、並行して「たまご→幼虫→さなぎ→成虫」という成長過程も学んでいきます。多くの学校で行われるのがモンシロチョウとカイコの飼育です。どちらもとても簡単で、その変化が分かりやすいからです。



ここからが本題です。さて、昆虫はどうやって冬越しをしているのでしょうか。多くの人はどれも卵で冬越しをしているのだらうと安直に思っているようですが、それほど単純でもありません。

その昔、「バカたまご トカセ幼虫 チョウさなぎ ハチアリテントウ 親で冬越し」で、冬越しの姿を区別して覚えていました。覚えたからどうということもないのですが、観察眼は養えました。

○バカたまご： バッタ・カマキリは、卵で冬越しをします。

○トカセ幼虫： トンボ・カブトムシ・セミは、幼虫で冬越しをします。

○チョウさなぎ： チョウは、さなぎで冬越しをします。

○ハチアリテントウ 親で冬越し： ハチ・アリ・テントウムシは、成虫で冬越しをします。

◆卵で冬越しをする昆虫



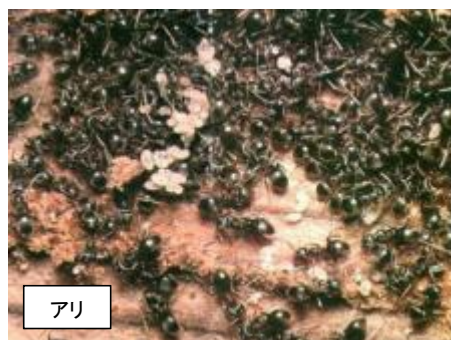
◆幼虫で冬越しをする昆虫



◆さなぎ（まゆ）で冬越しをする昆虫



◆成虫で冬越しをする昆虫



このように類型化しましたが、実態はそれほど簡単ではなく、種類によって例外が随所に見られます。まさに多様性の世界です。ただ、こういう知識があると、冬の散歩道も思わぬ発見があって楽しいものです。

最後に、前号の「足偏の漢字」に続いて、今号では「虫編の漢字」を列記してみます。

[illegible]

こうして並べてみても、悪趣味なだけで何の工夫もありません。そこで、気になる文字を挙げてみます。さて、いくつ読めますか？

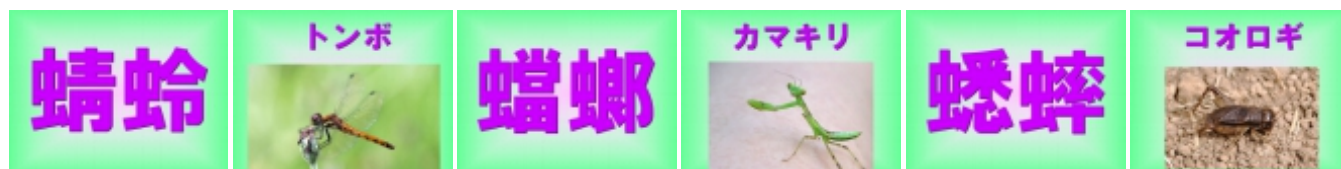


何をお伝えしたいのか、お分かりになりますか。そうです。いずれも昆虫ではありません。いえ、そもそも虫とは到底呼べないものばかりです。「虹」や「風」に至っては、どうして「虫」が付いているのかさえ想像し難いものがあります。この理由は「虫」の起源が「マムシ」にあるからです。昔の人はどうも、蛇のような爬虫類をひとまとめにして虫と呼んでいたようです。または、人でもけものでも鳥でも魚でもないものを全部十把一絡げに虫の仲間にしてしまっていたようです。

一方、もともとの昆虫の方には「蟲」が使われていました。こちらの方が、うじゃうじゃいる感じがします。「蠹く」との関係づけで見ると面白味が増すというものです。

ちなみに、「虹」はその昔、巨大な蛇または龍が創り出していると考えられていました。同様に、「風」も「帆」を意味する「凡」と「虫」、つまり「風を起こす竜神」が合わさってできています。「虫」に代わって「鳥」と合わさったのが「鳳」ということになります。ここには書き出していませんが、「蜃気楼」も、「蜃」とは巨大なハマグリのこと、これが気を吐いて描いた楼阁だと考えられていたことが語源です。

最後に、昆虫の漢字を列記しますが、余りにも難解過ぎて、書くのも読むのも怪しくなってきました。



(終)